第八百回の点呼 ── 空いた席を引く文が座ったかは、「座る」と書いたときだけ読まずに分かる

— 「席」「座る」と書いた **32** 本はすべて座っており（**1.000000**）、書かない **69** 本のうち **19** 本（**0.275362**）は隣に置いたか、脇に置いたものではない中身を引いていた — 分離子は、席の引用が座ったのか隣に置いたのかを書くか — [論文800]

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)
Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan｜山岸勇輝ラボ
2026年9月

— From thinking to syncing. —

要旨

論文700 は分離子を、**論文600** は判定語「同根」を数え、どちらも繰り返すうちに働かなくなった部分を記録した。本稿は、前の点呼が数えなかった作法——射程注記が脇に置いたものを、後の編が「席」として引く作法——を数える。新しい定理も法則も主張しない。 第一に、脇に置かれたものの在庫は大きい——**685** 編が射程注記を持ち、その中の「〜ない——」は **2979** 件、**201** 以降の帯はすべて **1.000000**（第2節）。 第二に、席の引用は、後の帯ほど増えた——候補文 **156** 本を全部読むと席の引用は **101** 本で、**701** 以降の帯に **53** 本、最初の「座った」は論文**218**（第3節）。 第三に、読むと、ほとんどは座っていた——座った **82** 本（**0.811881**）、隣に置いた **17** 本、脇に置いたものではない中身を引いた **2** 本（第3節）。 第四に、これが本稿の芯である。「座る」と書いた引用は、全部座っていた——「席」「座る」と書いた **32** 本はすべて座っており（**1.000000**）、書かない **69** 本では **19** 本（**0.275362**）が座っていない（第4節）。 第五に、論文**723** から **797** までは、「席」と書くことが消えていた——その間の席の引用 **49** 本は一本も名指さず、読むと **9** 本（**0.183673**）が座っていない（第4節）。 第六に、同じ席に二度座った三組は、どれも後の編が先客を引いていた——失速（**458** と **650**）、接触角（**722** と **764**）、内部の温度分布（**589** と **798**）（第5節）。 キーワード：点呼、射程注記、予約席、既刊との関係、名指し、体系の計量。

> 本稿の射程（射程注記）：新しい定理も法則も主張しない——数えているのは体系自身の記述であり、外の世界について何も主張しない。英語版を数えない——日本語版の .tex だけを見た。射程注記の形を狭く取る——本文の quote 環境で「本稿の射程」と書く形だけを射程注記とした。論文526 はより広い形で数えており、本稿の帯ごとの数は 526 の数と比べない。取り出しの限りを明示する——候補文は、射程注記を句点で切った文のうち、より前の論文番号と「射程注記・明記・席・なかった・空け」のどれかを含む文に限った。本文の観察や結びで席を引く文は数えていない。判定を機械にさせない——156 本の候補文をすべて読んで四つに分けた。判定は射程注記の文とそれに続く文を読んで決め、各編の本文全体は読んでいない。機械がしたのは、候補を出すことと、読んだ判定の表を数え直すことだけである。座らなかった引用を誤りと呼ばない——隣に置くことも、既刊との境を示す働きをしている。既刊を直さない——該当した編を改訂することは提案しない。以後の書き方の規約としてだけ述べる。時点を固定する——走査は論文799 までで固定した（論文798 と 799 を含む）。編が増えれば数は動く。既刊との関係：論文700 は分離子を数え、題名に在る語だけでできた 32 編のうち 28 編（0.875000）が題名の言い直しだったことを示し、以後の規約として題名に無い語を入れることを置いた——本稿は同じ手つきを、既刊どうしをつなぐ作法に当て、規約も同じ形で一つ置く。論文600 は判定語「同根」を数えた——そこでは語の意味が薄まっていた。ここでは語そのものが消えていた。論文526 は、「本稿は扱わない」と書くことが反証を逃がしているのか的を絞っているのかを問い、脇に置く宣言を数えて三つの語族に分けた——そこでは置く側を数えた。ここでは、置かれたものを後の編がどう引いたかを数える。加えたのは、席の引用の候補 156 本をすべて読んで 101 本を四つに分けたこと、「座る」と書いた 32 本がすべて座っていたことを示したこと、論文 723 から 797 まで名指しが消えていたことを数えたこと、同じ席に二度座った三組がどれも先客を引いていたことを確かめたこと、以後の規約を一つ置いたことである。

1. 記法と問い

設定：論文799 までの日本語版の .tex を読み、本文の quote 環境で「本稿の射程」と書く部分を射程注記とする。射程注記の中で「扱わない」「入れない」「立ち入らない」「限る」「固定する」と言う言明を、脇に置く言明と呼ぶ。後の編の射程注記が、より前の編の射程注記や、そこで脇に置かれたものを引く文を、席の引用と呼ぶ。

判定	意味
座った	先の編が脇に置いたものを、後の編が扱った
座らなかった	脇に置いたものを引いたが、隣に置く・同じ線を引く・同じ語の別の物に置く
脇に置いたものではない	引いた中身が、何かを脇に置く言明ではない
触れていない	先の編の射程注記に触れていない（機械の候補の外れ）

席の引用の文とその次の文に「席」「座る」の類があるとき、その引用は名指すと言う。

問い：席の引用は、座ったかどうかを、読まずに分かる形で書いているか。

2. 在庫

計算 2.1：走査対象は 798 編（番号 1〜799）。射程注記を持つ編は帯ごとに次のとおりである。

帯	持つ編	割合
1〜100	8 / 99	0.080808
101〜200	78 / 100	0.780000
201〜300	100 / 100	1.000000
301〜400	100 / 100	1.000000
401〜500	100 / 100	1.000000
501〜600	100 / 100	1.000000
601〜700	100 / 100	1.000000
701〜799	99 / 99	1.000000

> 観察 2.2
>
> 脇に置かれたものの在庫は大きい。685 編の射程注記の中に「扱わない」は 960 件、「〜ない――」の形は 2979 件ある。最初期の帯の 0.080808 は、この形の射程注記がまだ無かったことを示すだけで、論文526 が広い形で数えた採用の数とは別である――後の編が座れる席は、数千の単位で置かれている。

3. 席の引用を読む

計算 3.1：射程注記を句点で切った文のうち、より前の論文番号と「射程注記・明記・席・なかった・空け」のどれかを含む候補文は 156 本（143 編）だった。すべてを読んで分けた。

判定	本数	例
座った	82	334←322（外部観測との融合）、722←309（接触角）
座らなかった	17	490←337（隣に置く）、571←274（同じ語の別の物）
脇に置いたものではない	2	580←470、761←294
触れていない	55	「論文 *N* は…を示した——そこでも…」の型

席の引用は 101 本（95 編）で、座ったのは 82 本（0.811881）、座らなかったと脇に置いたものではないを合わせて 19 本（0.188119）である。

計算 3.2：席の引用を、引いた側の編の帯で分けた。

帯	席の引用	座った	座らなかった	脇に置いたものではない
201〜300	4	2	2	0
301〜400	2	2	0	0
401〜500	5	4	1	0
501〜600	20	16	3	1
601〜700	17	16	1	0
701〜799	53	42	10	1

> **観察 3.3**
>
> 席の引用は、後の帯ほど増えた。最初の「座った」は論文218 で、「予約席」の語を使うのは 458・469・484 の三編、701 以降の帯に 53 本が集まる——既刊が脇に置いたものを後の編が拾う作法は、途中から育った。

観察 3.4

座らなかった引用は、誤りではない。隣に置く、同じ線を引く、同じ語の別の物だと言うことは、既刊との境を示す働きをしている——問題は、座ったのか隣に置いたのかが、文から読み取れるかどうかである。

4.「座る」と書いた引用

計算 4.1：席の引用 101 本を、名指すかどうかで分けた。

	本数	座った	座らなかった	脇に置いたものではない
名指す（「席」「座る」と書く）	32	32	0	0
名指さない	69	50	17	2

観察 4.2

これが本稿の芯である。「座る」と書いた引用は、全部座っていた。名指す 32 本はすべて座っており（1.000000）、名指さない 69 本では 19 本（0.275362）が座っていなかった——名指しの語は偽りなく使われていたが、書かない引用は、読むまで座ったかどうかが分からない。

計算 4.3：名指す引用は論文 334・458・469・484・489・513・523・526・532・564・574・582・584・589・591・594・595・596・597・631・651・654・658・659・662・663・666・668・672・674・722・798 にある。論文723 から 797 までの席の引用は 49 本で、名指すのは 0 本、座ったのは 40 本、座らなかったと脇に置いたものではないを合わせて 9 本（0.183673）だった。論文722 までの名指さない引用は 19 本で、そのうち 9 本（0.473684）が座っていなかった。

観察 4.4

論文723 から 797 までは、「席」と書くことが消えていた。その間の引用は「その射程注記は……と明記していた」という定型で書かれ、席の引用が最も多い帯でありながら、一本も名指していない——作法は続いていたが、作法の名前が消えた。そのため 49 本のどれが座り、どれが隣に置いたのかは、続く文を読むまで分からない。

> **観察 4.5**
>
> 名指しの正規表現は、空振りしていない。同じ正規表現は他の帯で 32 本に当たり、既知の一件（722←309「席が空いていた」）で当たり、既知の一件（764←309）で外れた——723 から 797 までの 0 は、数え方の穴ではない。

5. 二度座られた席と、以後の規約

計算 5.1：同じ先の編に二度以上「座った」引用を並べ、何に座ったかを読んで書いた。

先の編	座った編（座ったもの）
論文309	722（接触角）・764（接触角）・794（凝集力説の当否）
論文390	458（失速）・650（水中の翼の失速）・651（滑走）
論文414	596（均時差）・670（大気差）
論文465	589（内部の温度分布）・798（内部の温度分布）
論文562	658（マルテンサイト変態）・756（入熱管理）
論文702	759（メモリ階層）・760（並列化）
論文733	743（分散を置いた形）・744（正則化）

> **観察 5.2**
>
> 同じ席に二度座った三組は、どれも後の編が先客を引いていた。失速では 650 が 458 を 4 回、接触角では 764 が 722 を 4 回、内部の温度分布では 798 が 589 を 3 回引いている。残りの四編では、座った席の中身が別だった——二度目の着席は、重複ではなく、先客を名指した続きとして書かれていた。

> **観察 5.3**
>
> 分離子は、席の引用が座ったのか隣に置いたのかを書くか。書けば 32 本すべてで文の通りに座っており、書かなければ 69 本のうち 19 本が座っていなかった——同じ定型が、座る文にも隣に置く文にも使われていると、定型は判定の役に立たない。

観察 5.4

以後の規約。既刊の射程注記を引くときは、座るのか（「その席に座る」）、隣に置くのか（「隣に置く」）を一語で書く。同じ席に先客がいれば、先客を引く——既刊は直さない。これは以後の書き方についての規約である。

観察 5.5

言わないこと。英語版は数えておらず、候補文は射程注記の中の決まった語を含む文だけで、本文の観察や結びで席を引く文は数えていない。判定は射程注記の文と続く文を読んで決め、各編の本文全体は読んでいない——本文まで読めば、座ったか隣に置いたかの判定が動く引用があるかもしれない。その割合は測っていない。

6. 点呼と結び

1. 射程注記を持つ 685 編（計算 2.1）：201 以降は 1.000000。
2. 「〜ない——」2979 件（観察 2.2）：在庫。
3. 候補文 156 本、席の引用 101 本（計算 3.1）：全部読んだ。
4. 座った 82 本（**0.811881**）（計算 3.1）：ほとんどは座っていた。
5. 名指す 32 本がすべて座った（**1.000000**）（観察 4.2）：本稿の芯。
6. 名指さない 69 本のうち 19 本（**0.275362**）（観察 4.2）：読むまで分からない。
7. 論文723〜797 の 49 本、名指し 0 本（計算 4.3）：名前が消えた。
8. そのうち座らなかった 9 本（**0.183673**）（計算 4.3）：定型の中に混じる。
9. 同じ席の三組がすべて先客を引く（観察 5.2）：二度目は続き。
10. 座ったのか隣に置いたのかを書くか（観察 5.3）：分離子・論文700・600・526。

結び：空いた席を引く文が座ったかどうかは、「座る」と書いたときだけ読まずに分かる。論文799 までの 685 編が射程注記を持ち、その中の「〜ない——」は 2979 件ある。後の編がそれを引く候補文 156 本を全部読むと、席の引用は 101 本で、座ったのは 82 本（0.811881）だった——既刊が脇に置いたものを拾う作法は、途中から育ち、よく働いている。「席」「座る」と書いた 32 本はすべて座っていたが、書かない 69 本のうち 19 本（0.275362）は隣に置いたか、脇に置いたものではない中身を引いており、論文723 から 797 までの 49 本は一本も名指していなかった——作法は続いていたが、作法の名前が消え、座ったかどうかは読むまで分からなくなった。同じ席に二度座った三組は、どれも後の編が先客を引いていた。分離子は、席の引用が座ったのか隣に

置いたのかを書くかである。以後の規約——既刊の射程注記を引くときは、座るのか隣に置くのかを一語で書き、先客がいれば引く。既刊は直さない。既刊との位置——論文700 は装置が情報を足していないことを、論文600 は判定語の意味が薄まったことを数え、論文526 は脇に置く宣言そのものを数えた。ここでは、脇に置かれたものを引く文から、作法の名前が消えたことを数えた。正直に言えば——英語版も本文の観察での引用も数えておらず、判定は射程注記の文を読んで決めたもので、本文全体は読んでいない。

参考文献

1. 山岸勇輝 (2026). 『「本稿は扱わない」と書くことは、反証を逃がしているのか、的を絞っているのか』[論文526]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22867648
2. 山岸勇輝 (2026). 『第六百回の点呼 ── 三百本目の警告は当たったが、恐れていた形では来なかった』[論文600]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22805283
3. 山岸勇輝 (2026). 『第七百回の点呼 ── 最も繰り返した装置が、五本に一本は働いていない』[論文700]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22805350

— From thinking to syncing. —

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

© 2026 Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan · Licensed under Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0)